エメラルド、深く潜入せよ

ロナルド・バース
鷺村達也訳

THE EMERALD ILLUSION

エメラルド、深く潜入せよ

ロナルド・バース
鷺村達也訳

Hayakawa Novels

THE EMERALD ILLUSION

by Ronald Bass
Copyright © 1984
by Ronald Bass
First published 1984 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
William Morrow & Company, Inc.
through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

検印
廃止

エメラルド、深く潜入せよ
昭和59年9月30日　再版発行

著　者　ロナルド・バース
訳　者　鷺村達也
発行者　早川　清

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(252)3111(代表)
振替　東京・6-47799

印刷　株式会社亨有堂印刷所
製本　大口製本印刷株式会社

定価　1500円
0097-904860-6942

エメラルド、深く潜入せよ

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1984 Hayakawa Publishing, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

私の生を私たちの生にしてくれた

クリシーとジェニファへ

謝　辞

ジェイ・アクトンへ――
君の十年近くにもわたる誠実な友情と賢明な助言と休みない努力に対して、

メリンダ・ジェイスンへ――
君の信義と楽天主義とエネルギーに対して、

ジョン・サンガーへ――
君の自信と勇敢な支援に対して、

ヒレル・ブラックとフレディ・フリードマンへ――
君たちがこの物語の最初の部分の構想をまとめるために果たしてくれた役割に対して、

パット・ゴルビッツへ――
君がいてくれたことに対して、

私は謝意を表明したい。

1

ワルター・ホフマンは突然目を覚ました。心臓が勢いよく搏動しており、もろもろの想念も、彼の目覚めを待っていたかのように生き生きと息づいていた。それはきっと、屍体を窺う禿鷹の群のように、眠っている間じゅう彼の周りで存在を主張しつづけていたに違いない。

ホフマンは、その想念の禿鷹を一羽ずつゆっくりと追い払った。最後に一羽、アンナと彼女の高熱のことが残った。彼女の熱は、その痩せ衰えた脇腹の、肋骨の下にある痛みから来ていた。医師は肝臓といい、ホフマンは彼女の死が避けられぬことを一度は覚悟したのだが、その四日後、それが医師の誤診であったことがわかり、幸運にもアンナは、その後徐々にではあるが回復しはじめていた。

明け方の闇のなかで、最後の禿鷹がまだホフマンの肩先にしがみついていた。彼は、そっとアンナのほうへ寝返りを打った。すると、アンナの体の熱っぽさがすっかり消えていて、さらに体をすり寄せると、自分の体温の反応が彼女のヒップからやわらかく伝わってくる。このまま眠らせておこう。彼は、そっと体を離した。最後の禿鷹は、その大きな翼をゆっくりと音もなく羽ばたかせて姿を消した。

ホフマンは、月曜日ごとの朝礼に備えるため、気力を奮い起こしながらトイレに立った。月曜日の朝礼というのは、いわば平凡な日常性という名のエンジンを始動させるために、時代遅れの心理的なクランクを回すことだ。具体的には、己れの生き方の深遠な意味を分析し、判定しようとする欲求をふり払って、日常の現実——処理可能な当面の問題への対処にのみ没頭するための心理的な切り替え作業にほかならない。そして、ひげ剃りと一杯の濃いコーヒー——これでホフマンは、今週いっぱいを知能不要の自動操縦パイロットで過ごせるわけだ。

だが、ワルター・ホフマンが希求するのは、必ずしも知能不要の状態ではない。彼にとって知能は唯一の友であり味方であって、これまで四十二年間の交情で一度も彼を裏切ったことがない——少なくともこんどのプルゼスナッチに関係するまでは。

石けんを泡だてながら、彼は鏡に目をやった。おだやかで人間味があり、親しみのもてる顔だ。やわらかい素直な黒い髪、彫りの深い顔の造作、知的な眼。薄い唇は一見い

たずらっぽく、もの問いたげで、ユーモアのセンスと他者を思いやる心が色濃くにじんでいる。

黒い禿鷹はすべて姿を消したし、アンナに危険はなくなった。だが、ひげを剃りシャワーを浴びるホフマンの念頭を離れないものが一つあった——解きがたいプルゼスナッチの謎だ。これまで彼は、くり返しこれを考えてきたが、考えあぐねるだけで解答は出せなかった。これに失敗すれば、彼にとって初めての挫折なのだが、結局は彼の命とりになりそうだ。

台所に行くと、七歳の長男ルディが、流し台のわきに椅子を置き、その上に乗って大きな鉄製のポットに水道の蛇口から水を入れようと苦心していた。父親のコーヒーをいれる湯を沸かすためだ。これは、ルディが最も誇りとしている聖なる朝のつとめなのだ。

「おはよう」と、ホフマンは対等の男性に言うような調子で声をかけた。

「おはよう、パパ」

ルディは、その小さな両手でしっかりとポットを持ち、注意ぶかく床におりた。三日前の金曜日に一度ポットを取り落とし、すさまじい音を立てて家族をびっくりさせているので、彼は信用失墜を恐れていた。いまもし父親が手伝おうとでもすれば、それこそまさに自分が信用を失った証拠だ。ルディは父親を見守っていたが、父親は両手をうしろに組み、ただ微笑をうかべて立っていた。ルディの好きな微笑だ。

「友だちに、君のような人がいるといいんだがね」と、ホフマンは息子に言った。

ルディは、にっこり笑顔を見せた。彼は、父親のそんな話しかけに返す言葉を知らないが、それを通じて伝わってくる温かみははっきり感じとっていた。彼は、ありったけの力を出してそのポットを差し上げ、そっとバーナーの上にかけて点火した。真剣そのものの作業ぶりだ。彼が二度と同じ失敗をくり返すはずはなかった。

「オスカーを連れてこよう」と、ホフマンは言って台所を出て行った。

オスカーはやがて満四歳、アンナに似たブロンドの、肥った男の子だ。兄のルディは色が黒いが、オスカーのほうは色白だ。ベッドのなかで目を覚まし、父親の来るのを待っていた。ホフマンは、何もいわずに放り上げるようにオスカーを抱き上げた。オスカーは、いつものようにフーッと大きく息を吸い、ついでクックッと笑い興じた。

「きょうは何曜日だか、知ってるかい？」と、ホフマンが言うと、

「木曜日」と、オスカーは自信ありげにでたらめを答えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「月曜日だ」父親は、訂正よりむしろ是認の調子で言った。
「ということは、どういうことなのかな？」
「ということは、パパはおつとめが休み、ということ」と、オスカーの言うことはいつも決っている。
「ということは、いいかい、パパがお勤めから帰ったら、いっしょに夕食をして、それから遊んであげるってことだ」
ホフマンはそう言い、幼い息子をトイレへ追い立てて用を足させた。
三人で朝食をすませると、ホフマンは階上の自室へ行って服を着替えた。迎えの車が十五分後にやってくる。
やがて階下へおり、黒にシルバーの制服の上着を肩にかけながら窓の外を見た。迎えの車が来ている。ホフマンは、上着のボタンをかけながら、息子たちに出がけのグッドバイを言った。兄弟は、母親が目を覚ますまで静かに遊んでいなければならない。だいぶ気分がよくなっているとはいえ、まだかなり衰弱しているからだ。
ホフマンは襟のボタンをかけ、二人の子供にキスをした。ルディが父親のためにドアを開けた。さわやかな四月の朝だ。空気がすばらしく澄んでいる。ホフマンは、階段を一段おきに駆け下りるといつもの所でうしろをふり返り、子供たちに手を振った。銀の稲妻の襟章に朝の日差しがきらめいた。ルディが真剣な顔つきで手を振り返した。
道路に出ると、ホフマンはいつもと少し違う型の敬礼に迎えられた。同じナチ式でも、腕の突き出し方がひどく堅苦しい。新しい運転手だ。若いSS少尉だが、ホフマンはまったく見覚えがなかった。
「おはようございます、SS准将」と、少尉はいった。その声は、ホフマンの好みには少し大きすぎた。響きに金属的なとげとげしさがあって、静かな住宅街の平穏を乱すように思われた。
ホフマンは、ただ少尉の顔を見やった。べつに変った目付で見たわけではない。穏やかな、率直な視線だった。だがそれは、わけもなく少尉をどぎまぎさせた。少尉は弁解がましく説明をはじめた——従来の運転手が週末に東部戦線へ転属になったこと、その人員配置上の変更をホフマンに報告する時間的余裕がなかったことなどを。そんなことは彼の責任ではないし、またホフマンが質問したわけでもない。なのに彼は、無言のホフマンに向って卑屈に陳謝のことばを並べたてた。もっとも、たいていの男が梅毒を嫌がるように、ホフマンは予告なしの出来事が大嫌いだと聞かされてはいたのだが——。
ホフマンは、この少尉のことは知らないにしても、この輩(やから)のことはよく知っている。彼は胸のうちでいぶかった—

ルディは、この少尉のことや、この少尉の同類が急速に正常人のなかに繁殖してゆくのをどう思うだろう？　また、何か恐しい宇宙の異変でもあって、ルディ自身がもしこの少尉に似たものに変身でもさせられたら？　ホフマンは、口を利く前にそんな不安を払いのけた。

「今朝は迎えに来てくれて、どうもありがとう」と、彼は少尉の眼を見て言った。それは、少尉の個人的な好意に対して感謝するような言い方であった。が、同時に、その好意を受けるのは今朝に限ってのこと――当の少尉が、今日の午前中にも、どこか神のみぞ知る所へ送られるやも知れぬのだ――という、かすかなヒントも含まれていた。

「准将、けさはどのルートを参りましょうか？」

この日は一九四四年四月六日。連合軍のベルリン空襲が激しさを加えている折柄、ホフマンが、不穏な被爆地区を避けて通るよう求めるかもしれぬので、少尉は一応聞いてみたのだが、実はそれは儀礼的に質問したにすぎなかった。これまで彼が送迎したSS将校たちは、一人の例外もなく、敗北主義や懐疑主義に利用されかねない行動は、頑としてこれを拒否するのが常だった。つまり、彼らは最も積極的な精鋭の集団だったのだ。

「直行ルート」

ホフマンはそういって、うしろのシートに腰を落ち着けた。その顔は、SD本部に出勤する、いつもの彼の表情になっていた。

2

ホフマンの車はまず北へ、ついでハーフェル河岸をそれて東へと向った。ツェレンドルフの住宅地からSD本部のあるシャーロッテンブルクへの経路はヴィルマースドルフ区を通る。ここは爆撃の被害の大きい地区だ。被爆の状況は、しかし、一様ではない。完全に潰れてしまった建物があるかと思うと、そのすぐ隣に無きずの家が残っていたりする。巨大な悪意の鉄槌が気まぐれに振りおろされたような感じだ。

しかし、そうしたベルリン市街の惨状にも、車を運転している若いSS少尉は一向に心を動かされる様子がなかった。それは当然払うべき運命の代価であって、単に復讐の念をつのらせるだけのものかもしれない。その復讐の念が、ときに物騒な白昼夢をはびこらせるのだが、この若いSS少尉などはそれを異常とも物騒とも感じないだろう。SSの仲間は、みな似たような心理を共有しているからだ。彼らは一般から遊離した集団であり、すでに変質しつつあるドイツ社会の心臓と血液のなかに寄生するコロニーなのだ。そしてこのコロニーは、近く社会の〝模範〟たるの域を超え、その綱領がしめすように、宿主であるドイツ社会の構造を変革し、自らがドイツ国家そのものになり代ることを期している。

たいていの有機体の寄生物はそうであるが、SSもともとは言えば実につまらぬものから発生している。この略称の語源である親衛隊は、一九二三年にナチ党の護衛団として発足したが、本来ヒトラーの個人的な身辺警護のための無頼漢の小集団にすぎなかった。しかし、その後SS長官ハインリヒ・ヒムラーの指揮の下、この無類に融通のきく有機体は、秘密警察や強制収容所管理のほか、獰猛をきわめる戦闘部隊から複雑巧妙な人間屠所の創設・運営までも独占する、巨大な組織に成長したのである。その拡大・成長ぶりは、首脳部の想像力が枯渇せぬ限り無限につづくかに見えたが、実にその首脳部には、想像力豊かな才能がひしめいていたのである。

一九三二年、SSは、ナチ党の安全を脅かすものに対する警戒を喚起するため、SDと略称される保安部隊を創設した。やがてこれは、ラインハルト・ハイドリヒの指揮の下、これまた本来の設置目的を超えて大きく拡大していっ

た。ハイドリヒは放縦な男だったがカリスマの持主で、ヒトラーの第三帝国で名を馳せた人物中最も異彩を放った一人である。彼は一九四二年六月に暗殺されたが、生前、ヒムラーの帝国であるSSのなかに自らの帝国SDを築きあげていた。SDは、SSが新生ドイツの骨格となり筋肉となるに及んで、その神経中枢をなすに至ったのである。一九三九年当時、創設以来わずか七年にして、すでにSDは全ドイツの保安業務全般を担当する国家保安本部（RSHA）に成長していた。

RSHAは七つの部局から成っており、うちの一つを除いて、他はみなベルリンの都心、ティアガルテン区のプリンツアルブレヒト街八番の巨大な本部ビルに入っていた。第一と第二部は人事と総務、第三部は内国情報、第五部は捜査、第七部は公安、そして第四部——これが引き続きこの組織の中心、すなわち政治に暴力を、法律に恣意を交配してできた非人間的な突然変異体のゲシュタポである。

この本部ビルの西、ティアガルテンの南側に接するシャーロッテンブルクのベアケール街三二番に、ただの四階建てながらあたりを威圧するような煉瓦建てがある。正面は通りに沿ってゆるやかにカーブし、窓に花の鉢を置いたのもかなりある。もともとユダヤ人の老人ホームとして一九三〇年に建てられたのだが、一九四一年、RSHAが接収して入居者を立ち退かせ、その第六部すなわちSD対外情報部をここに置いた。

これがワルター・ホフマンの出勤先だ。運転席の少尉は、道路上に散在する瓦礫の山や軍のトラックの通行に妨げられてはブーブー言いながら車を走らせた。

SD対外情報部は、他の部局とは、その建物が離れている以上に縁の遠い存在だった。制服は同じSSの制服を着ていても、心情的にかなり違っていた。ともにヒトラーのスパイであることに変りはなかったが、こちらは色合いの違った人間の混在する集団だ。もちろん政治思想上の正統性と血統の純粋性は要求されていたが、ときとして優れた特殊能力者が必要だったし、そういう能力をそなえた人間はめったにいないため、資格や条件にこだわらず、見つけ次第にスカウトするほかない事情があった。

そういうわけでこのSD対外情報部は、いわば人間と怪獣の交配種の集団であり、その中で仕事をし、生きているホフマンは、同僚たちに対して独自の人物評価方式をつくっていた。そして、同僚の一人一人の人間性と獣性の構成比率をそれに照らして測定した。自分自身のことも、毎日のようにこの尺度に照らしてみる癖がついていた——ちょうど黒色腫の斑点が現われはしないかと、ひっきりなしに自分の皮膚を点検するヒポコンデリー患者のように。

SD対外情報部の部長の椅子には、この三年来ワルター・シェレンベルクSS少将が坐っていた。弱冠三十一歳という若さで大ハイドリヒを丸めこみ、無名の一青年から一躍この要職にのし上がった切れ者だ。彼のことを良く思わぬ連中は、美男でぼってりした彼の体つきがハイドリヒを虜にしたなどと噂していたが、ホフマンはそういう下らぬ憶測に惑わされはしなかった。事実、シェレンベルクという人物は、仮りに卓越したスパイでなかったとしても、政治的な権謀術数において類まれな能力を持っていた。その卓抜さは、彼がハイドリヒの死後もその地歩を維持し強化したばかりか、さらに組織を拡大し伸長させていったことで充分に実証されている。

シェレンベルクの印象としては、その剛健さと裏腹の態度物腰、優雅さへの憧れ、物質的な贅沢への耽溺などが顕著だが、彼の本質的な性格は、徹底した自己中心主義であった。他人の運命などは——それが劣等なユダヤ人やポーランド人の身の上であろうと最高指導者ヒトラーの運命であろうと——実は、彼にとってはどうでもよいことだった。彼が確固たる決意をもって情け容赦なく追求してやまなかったものは、ひたすら自己の栄達と保身だけだったのであって、そのために利用できるものは躊躇なくそれを利用した。そしてこれまで、彼はその目的を実にみごとに達成してきたのである。

ワルター・ホフマンも、そういうシェレンベルクの栄光のために利用された一人だ。シェレンベルクは、彼に自分の右腕としてのポストを与え、軍の階級で大佐に当るSS連隊指揮官に任命したが、ホフマンもまたその期待に充分応えたのであった。彼は、大きな権限が与えられるにつれてますます見事にそれを消化した。シェレンベルクはホフマンのことを、馬糞だらけの原っぱに光る一個の宝石だと広言し、間もなくホフマンひとりに全面的な信頼をおくようになった。重要な決裁事項はすべてホフマンのデスクへ流れてくるようになり、他方シェレンベルク自身は、宮廷政治の駆け引きにますますその腕前を発揮するようになっていった。

そしてシェレンベルクは、本気かと思われるほど短期間で、しゃにむにホフマンをSS准将に昇進させた。これは軍にはない階級だが、大佐と少将の間に当る高位である。この異例の昇進は、他の野心的な部下たちの羨望を無視して——というより、むしろ刺激することを狙って——強行された感がある。結果としては、シェレンベルクが予想した通り、昇進したホフマンに対するスタッフの態度は、敵意をあらわにするのでなく、むしろ舌を長く出して飼主の足許にうずくまる犬のそれに似たものであった。昇進を狙

っての競り合いなど、始まる以前に終わっていた。いまや昇進を望む者は、まずホフマンの信を得なければならない以上、ホフマンは、昨日までの同僚から畏敬にも似た協力をうける立場に立ったのである。

だが、その彼にも、いまやプルゼスナッチという頭痛の種が大きくわだかまっていた。

車を降りてから自室までの途中も、それは彼の思考を占領していた。

当時ドイツの首脳部では、今後ドイツにとっての唯一かつ決定的な試練は、一九四四年の夏と秋をなんとか無事に乗り切ることだ、とする考えが自明のこととされていた。この期間に連合軍のヨーロッパ大陸侵攻を阻止しさえすれば、一九四五年の春までには、ドイツのヨーロッパ占領は既成事実として固まり、永続的なものとして定着する。しかし、その前年の二、三カ月間に、ヒトラーが無敵を誇る防衛線アトランティクヴァルが、この大戦の勝敗を賭けた連合軍の捨て身の攻撃をうけることは間違いない。そこで問題は二つ、その攻撃がいつ、どこに対して仕掛けられるか、だ。

ヒトラーの兵力は想像を絶するほど厖大——三百二個師団、一千万に上る武装部隊——ではあったが、戦線は危険なまでに伸びきっていた。百七十九個師団はロシアと東部戦線に展開しており、西からの攻撃に対して使用できる兵力は全兵力の四割にすぎなかった。しかも、すでにバルカン半島に二十六個師団、イタリアに二十二個師団、スカンジナビアに十六個師団が展開しており、フランスには、カレーから西へ、ノルマンディを経てブルターニュ、さらに南へ回ってビスケー湾にいたる、長大な海岸線の防衛にわずか五十九個師団が残るだけとなる。これに対して連合軍側は、ただ一つのチャンスに希望のすべてを賭けていた——つまり、いかにヒトラーが全戦線にわたって強力無比を標榜して狂奔しようとも、ある地点である時機に防衛が手薄であればよいという可能性だ。

プルゼスナッチとは、この連合軍のヨーロッパ侵攻作戦の秘密、すなわちその上陸地点とその時期を知っているイギリス人またはアメリカ人の誘拐を目的とする作戦のコード名である。

これはもともとハインリヒ・ヒムラーの着想だったが、ある夜彼がシェレンベルクの邸を訪れ、ブランデーをすすり高級シガーをくゆらせながらこの話を持ち出した。いわば、これが運命的な夜となったのであった。はじめのうちはヒムラーも慎重だったが、夜がふけるにつれてしだいにその意図を明白に打ち出してきた。ヒムラーとしては、実はヒトラーに対して、プルゼスナッチは現実的な作戦であ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.